

---

# 生人形

ayu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生人形

### 【Nコード】

N0358T

### 【作者名】

ayu

### 【あらすじ】

人形師の青年と、心を持った人形のお話。

## （前書き）

楽しんで頂ければ幸いです。

0

貴方を暖めてあげたいのに

ねえ、泣かないで。

貴方が泣きやむまで、抱きしめていてあげるから。  
あたしが抱きしめて、暖めてあげるから。  
なのに、どうして？

どうして、あたしはこんなにも冷たいの……？

1

ゆめ。

夢。

ユメ。

「君の夢を教えて？」

夢なんて、考えたことないよ。

今まで、あたしは『心』を持っていなかったから。今は楽しくて、  
これからのことなんて思いもしなかったから。ただ、“今”が続け  
ばそれで良い。

「“今”が、ずっと続いて欲しい」

「良いね、それ。きつと素敵だ」

「うん、きつと素敵」

あたし達は互いに顔を見合わせ、共に笑った。

貴方はあたしに、『心』をくれた。ただの『器』でしかなかったあたしに、貴方は命を吹き込んだ。作り物の『器』に、本物の『心』。あたしは自分の意思を持ち、貴方との時間をいとおしむ。この時間が壊れなければ、あたしは幸せ。だから、“今”が続けばそれでいいと思う。

「ずっと一緒にいよう」

「うん。ずっと一緒」

一つの部屋の中で、向き合って座るあたし達。蝋燭の灯る、飾り気のない広い部屋。一組の蒲団の上で、向かい合って座るあたし達。あたしが目を閉じると、貴方はあたしの頭を撫でてくれる。ふわふわと、優しく撫でる。

「好きだよ」

貴方はあたしの頬に手を添え、微笑んだ。貴方の手は白くて、とても綺麗。

「僕も」

こう言って、あたし達は唇を重ねる。

あたしが望むのは、貴方との時間。

夢…。

あたしの夢は、貴方と同じ時間を生きること。

## 2

“由愛”にしよう。

こんなに必死になってものを考えたのは久しぶりだ。だけど、君には素敵な名前を贈りたかった。僕の愛しい女性。その『女性』は、人形。球体の関節を持つ、精巧な型代だ。だけど、君は僕が今まで生きてきて、初めて愛しいと思った人だ。僕は君の器を作り、心を与えた。そして今度は、名前を贈りたいと思った。僕は君に“愛す

ること”を教えてもらった。だから、愛の由来と書いて、“由愛”。単純かもしれないけど、“ユメ”という音の響きも気に入った。

「お前は今日から、“由愛”だよ」

君はどんな反応をするだろうか。この名前を、快く受け取ってもらえるだろうか。何もない空間に向かって、僕は一度練習する。君の前で、きちんと言うことが出来るように。まるで不器用な学生のような。そう思って、僕は一人、クスリと笑う。

「“由愛”」

気に入ってくれる。きつと。

蠟燭に火をつけ、街を見に行った恋人の帰りを待つ。長く美しい黒髪を持つ、僕の恋人。

「主」

襖の向こうから、愛しい声。

「ただいま」

「お帰り。寒かったろう？早く中へお入り」

季節は冬。外では真白な雪がちらちらと舞っている。人形が気温を感じるのかどうかは知らないが、由愛は優しく笑って返事をする。

「うん」

表情の豊かな彼女は、まるで本物の人間のような。

彼女も初めはただの人形で、売り物だった。精巧な人とよく似た人形を作り、売ることが僕の仕事だから。けれど彼女は今までのどの作品よりも美しく人間らしく出来たものだから、心を与えてみようと思った。初めはただの思い付き。上手くいけば高く売れるかもしれないと、単純にそれだけを考えていた。深い理由など何もなかった。

その人形は、動き出した。

心を持った人形は、世界中のどんなに優れた女性よりも美しく優しく清らかだった。世界の汚れたことも汚れたものも知らぬ君。手離したくないと思った。心から。大切にしたいと思った。

「ねえ、お前にね、あげたいものがあるんだ」

「なあに？」

可愛らしく首を傾げる。本当に、なんて愛しいのだろうか。僕は売るはずだった人形に“恋”をした。

「お前に名前をあげようと思ってね、ずっと考えていたんだ」

「……名前？」

愛しくて、僕は小さな体をぎゅっと抱きしめた。

「そう、名前。お前の名前は、“由愛”だよ」

「“ユメ”」

「そう、“由愛”。愛の由来と書いて、“由愛”」

抱きしめたまま、耳元でささやく。作り物の硬い身体を抱きしめたまま。

「由愛……。素敵な名前」

「君は僕に、愛を教えてくれた人だから」

彼女は、ふふとかすかに笑いを零した。

貴方はあたしを“人”と呼んでくれるのか、と。あたしはこうして心を持ち、話し、感情を表現することができる。けれど、あたしは人形。貴方の子を残すことすら出来ないのに、それでも貴方はあたしを“人”と呼んでくれるのか、と。

「由愛、僕は君を愛している。どうでもいい人を人形のように扱うことは出来ても、心から好いている人を人形のように扱うことは出来ないよ」

だからどうか、そんな悲しいこと言わないでくれ。

「……ありがとう」

静かに呟く。

「名前、大切にするね」

泣き出しそうな顔でにこりと笑って、由愛は目を閉じた。

「“由愛”」

呟いて、由愛は僕の頬に口付けた。

「嬉しい。すごく、嬉しいよ」

「ユキ」

名前を与えてから、由愛は僕のことを名前で呼びたいと言ってきた。

「ユキ。……ユキ」

二人だけで暮らしているのだから教える必要はないだろうと思っていたが、やはり呼び合うには名前が必要だ。だから由愛に僕の名前を教えた。「志音」というのが、僕の名前。ただ、親しい人は皆“ユキト”ではなく“ユキ”と呼ぶ。だから、由愛にもそう呼んでもらうことにした。由愛はその名前を、何度も噛み締めるように呟いていた。

何度も何度も、囁くように。そして、心底嬉しそうな笑みを浮かべる。

「ユキ、好きだよ」

「知っているよ。僕も、由愛を愛している」

昔の自分なら、こうして愛しい人に甘い言葉を囁くことなど想像もしなかっただろう。それまで僕は愛というものを知らなかったから。幼いころに両親が他界し、それ以来親戚中をたらい回しにされて生きてきた。時には奴隷のように扱われ、時にはまるでいないもののように無視された。

人形師の親方のところへ弟子入りしたのは八つの時。そこで初めてまともな衣食住が確保された。ただそこに、愛はなかったけれど。二言目には追い出さず、出て行け、殺しちゃうぞ。それが親方の口癖だった。僕にだけその言葉を浴びせてきた。ここはこうするんだ、こうした方がいいと周りの奴等は手取り足取り教わっている中、僕だけはよく殴られていた。一週間も寝たきりになっていたこともある。その時でさえこの穀潰し、役立たずと罵られ、叩かれた。その分、誰よりも早く丁稚から手代、番頭となり、暖簾分けをしてもらえたが。



今になって考えると、それも親心だったのかもしれない。愛の鞭、という奴だ。期待されていたのかもしれない。鼻屑しているように見えないよう沢山の技術を教え込む為、そうしていたのかもしれない。けれど、当時はこの世に愛などというものはないのだと思っていた。そんなものはまやかしにすぎないと信じていた。

「由愛、こつちへおいで」

素直に頷き、近づいてくる由愛に、僕はわずかに目を細める。由愛の為に仕立てた赤い着物が眩しくて、よく似合っていた。大輪の牡丹の花は、艶やかだ。

「綺麗だよ」

頬を撫でると、由愛は気持ちよさそうに目を閉じる。

「ユキも。綺麗だよ」

髪、さらさらだね、と由愛は僕の髪に触れた。大嫌いだった色素の薄い髪、白い肌。幼いころは、異国の人間の血が入っているのかと良く苛められた。大嫌いだったのに、由愛がこうして触ってくるとそれすらも気にならなくなる。

由愛の隣は、なんて心地いいのだろうか。

4

どうやら風邪をひいたようだ。先から熱があるらしく、寒気がする。僕は丹前を羽織り、火鉢の傍に寄った。

「ユキ、どうしたの？ 寒いのか？」

「風邪を引いてしまったみたいだ。由愛に移ってはいけないから、そつちへ行っていてくれないか？」

「大丈夫だよ、あたしは人形だから。移ったりしないから安心して」  
あははと笑って、由愛は僕の額に手を当てた。暫くそうしていたが、やがて悲しげに目を伏せ、手を離れた。最近、由愛にはものの温度が分からないのだということが分かった。暑い、寒い、熱い、冷たい、そういった感覚が備わってないらしい。

「……そうか」

悲しいけれどその通りだ。由愛は、“人形”。

「なら、僕の隣に居てくれないか。由愛が傍に居てくれると凄く落ち着くんだ」

「うん」

僕の横に腰を降ろしながらそう言った。

「生姜湯でも作ろうか？ それとも、お布団敷く？」

「いや、いいよ。こうして、由愛の傍にいたいから。……由愛は、暖かいね」

僕は由愛の肩に寄り掛かり、目を閉じる。由愛は僕の背に腕を回して歌を歌う。心地良い澄んだ声。ああ、なんだか酷く懐かしい。子守唄のように響くそれは、語らうような恋の歌。愛しい人への優しい歌だ。

「どこで、覚えてきたんだい？」

「街で。小さな舞台が作られていてね、女の人が、歌っていたの。それで覚えた」

「……そうか、良い歌だ」

「うん」

由愛は小さく頷く。

「ねえ由愛、歌って？」

「うん」

頷いて、歌を歌う。とても優しい、恋の歌。

5

なかなか熱が引かないみたい。

あたしは生姜湯を作りながら横になっているユキを見た。時折咳もしているし、眩暈もするみたい。大丈夫？ って聞いたら大丈夫だよ、ってユキは笑う。けど、それが余計に心配になる。今はそうでもないみたいけど、本当につらそうな時でもそう言うから。

……人間になりたいな。そしたら、あたしに風邪を移せばいい。人に移せば早く治るってお隣のお兄さんが言っていたから。

「ユキ、生姜湯作ったよ」

「ありがとう」

言って、ユキは少しだけ笑う。湯呑を受け取り、ふうと息を吹き掛け白い湯気を吹き飛ばす。

「ユキ？」

「何だい？」

ふと、腕に小さな紫斑があるのに気が付いた。

「腕、どうしたの？」

「え？」

「左腕。痣があるよ」

確かめて、ユキは首を傾げる。

「どこかに、ぶつけたのかな」

どうしたんだろうね、とユキは湯呑に口を付けた。ず、と音を立てて一口飲む。

「美味しいよ、暖まる」

「早く治るといいね」

「うん、そのうち治るよ」

穏やかな時間。幸せで、ゆったりと過ぎていく時間にあたしは安心する。ユキもそこまで苦しそうではないし。あたしは無言のまま、湯呑を口に運ぶユキを眺めていた。いつまでも続きますように、と心の中で祈りを捧げながら。それはとても静かな祈り。

何かに蔑まれることも卑しめられることもない、ささやかな祈り。……いや。これは祈りに似た確信、だろうか。この生活がいつまでも続くものなのだという根拠のない自信を、無意識に胸の中に持っているのだ。

あたしは思う。いつまでも、ユキが許す限りこの生活は続いていくものなのだと。そしてそれは、きつと永遠にも思えるほど長い時間なのだろうと。この幸せは、長く続くものなのだ、と。

「由愛」

暫しの静寂を破り、ユキは湯呑を置いてあたしに手招きをした。あたしはお盆を傍らに置き、ユキに近づく。

「由愛」

ぎゅうと、抱きしめてくれた。

「ユキ？」

暫く、このままで……。

そう、聞こえた気がした。

6

「ユキ！」

ふらりと、辺りが揺らいだ。

辺りがというか、正確には僕の体が揺らいだ。由愛は僕の体を支え、心配そうに眉を寄せた。

「ユキ、大丈夫？」

「あ……。ああ、うん。大丈夫。ちよつと目眩がしたただけだから」

由愛に助けられるなんて情けないね、と僕はほぼ万年床に成りつつある布団に横になった。由愛は貧血時の基本通り、少し足を上げた状態にするべく僕の足の下に半分に折った座布団を置いてくれた。

「まだ、体調悪いの？」

「うん、ちよつとね。でも大丈夫だよ。この間診療所に行ったらただの風邪だって言われたから」

そう言いながらも僕は少し咳込んだ。心配を掛けまいとしての言葉だったのに、これではまるで説得力がない。そういえば、最近手足が痛い。内側から、というか、なんだか骨が痛いような感じがした。眩暈も酷いし、時折吐き気もする。それに小さな怪我が治りにくくなっていることも気に掛かる。

「でもでも、顔色、悪いよ。それに、お隣のお兄さんがあそこのお医者さんはヤブだって……」

「じゃあ明日にでも他の医者のところに行って来るよ」

「絶対だよ」

「うん、絶対に」

笑って、僕は静かに目を閉じる。心配そうな由愛の瞳を見ているのがなんだか辛い。

何でもないよ、大丈夫だよと言い続けることに罪悪感すら覚える。

こんなにも体が重いのに、僕は大丈夫だよと繰り返す。異常なほど感じる倦怠感、気づけば増えている身に覚えのない紫斑。この体は一体、どうなっているのだろうか。

泥のように纏わりついてくる不安。そして気怠るさ。

それを隠すために僕は目を閉じる。

何か 由愛を不安にさせることが、もしくは死ぬこと、だろうか  
を恐れ、僕は幾つもの願いを胸に秘める。

神様神様、お願いです。

信じてもない神様に、僕は必死になって縋り付く。

どうか神様、由愛だけは幸せに……

7

暫くして、ユキは血を吐いた。

あたしが買い物から戻ると、布団が赤く染まっていた。買い物袋を落とし、あたしはその様を凝視する。

「……ユ、キ？」

嫌だ。

「な、んで……？」

嫌だ！

嫌だ嫌だ！

ユキが死んじゃうー！！

何も考えられなくて、あたしは外に飛び出した。

「おや、由愛ちゃんじゃないか。どうかしたの」

穏やかな、何も知らない隣人の笑顔。

「ユキ……」

こんな時なのに、あたしの目から涙が零れることはない。

「由愛ちゃん？」

「助けて！ ユキがつ！ ユキが死んじゃう！！」

言うや否や、お兄さんはあたし達の家を駆け込んだ。そしてユキを見るなり叫んだ。医者を呼んで、と。放心状態のあたしに、早く、と彼は叫んだ。あたしは中途半端に頷いて、竦んだ足で走りだした。助けて。助けて。お願いだから、お願い、ユキを助けて。

「由愛……」

診療所の一室で、ユキは薄く目を開いた。

「……ユキ！」

「ねえ、由愛」

ユキは微笑み、あたしの頬に触れた。

「僕、もう長くないみたいだ。……ああ、由愛、お願いだから、そんな泣きそうな顔しないでくれ。僕はね、由愛の笑った顔が一番好きなんだよ……」

白くて、細くて、綺麗な指先。ユキの瞳から、一筋の涙が零れる。あたしはユキを抱きしめ、瘦せて骨ばった肩に顔を埋めた。ユキの身体がわずかに震えているのが分かる。

「暫く、このままでいて。酷く、寒いんだ……」

「……うん。ユキが、貴方が泣きやむまでこうしてあげてあげる。ずっと抱きしめて、暖めてあげてあげる」

……暖めてあげたいのに。

「泣かないで」

どうして、あたしはこんなにも冷たいの……？

結局、ユキは助からなかった。

血液の、病気だったという。

初めはまるで風邪のような症状で、次第に悪化し、死に至る。病名は『白血病』。

あたしはこれから、どうやって生きていけば良いの…？

優しい笑顔も、髪を撫でる柔らかな手のひらも、あたしを呼ぶ穏やかな声も、全部全部、一遍になくしてしまった。

分らない。

ああ、誰か、あたしをユキの所に連れて行つて。

でも、駄目だ。多分、きつとユキはあたしが死ぬことは望まない。

そしてそれ以前に、誰かがばらばらに解体でもしてくれない限りあたしは死ねないだろう。

あたしの瞳から、涙は流れない。

悲しくて、切なくて、あたしは無理やり口角を上げた。

ユキは最後に、私の笑顔が好きだと言った。だったら、あたしは笑つていよう。無理矢理でも、何でもいい。あたしは貴方の墓石の前で、ただひたすらに微笑んでいる。

いつかきつと、この体が錆びれ、動かなくなるその時まで。

あたしに死が訪れるまで、あたしは貴方の恋人でいよう。貴方が好きだと言った、この笑顔のままに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0358t/>

---

生人形

2011年5月31日12時07分発行